

## 第二章

# 聖なる巻物の守護者

## 第二章 聖なる巻物の守護者

古くからサルパートのエイトリ神信仰の中心的存在であった学校は、智慧の峰の中腹よりやや登った所に建っていた。歴史ある巫女達の教育施設は、現在では改築を重ねた三つの大きな建物からなっている。それぞれ教会と校舎と宿舎で、雪の中に尖った屋根の三階建ての大きな建物が向かい合うように建っていた。

智慧の峰が珍しく晴れた日。スハーラは学校と巫女の長サンザの部屋をたずねた。サンザの部屋は教会の三階にある。スハーラは軽くノックをして、いつもどおり返事を待たずに中に入った。巫女がこの戸を叩くとき、サンザが応じなかった事は無い。さほど大きくない部屋の床と壁は、長い年月をかけて巫女達の手で磨きあげられてツルツルに光っていた。部屋の中心には大きな安楽椅子が置いてあり、現在の聖なるリラ巻物の守護者はいつもどおり静かにそこに座っていた。

「じぎげんようスハーラ。エイトリ神の娘よ」

歳に似合わず、ふつくらとして血色のいいサンザは、おだやかなほほ笑みを浮かべてスハーラを迎えた。

「じぎげんうるわしゅうサンザ様。エイトリ神の声を告げ、リラの巻物を守る方」

年老いた巫女の長がクスクス笑いながらスハーラに話

しかけた。

「いつも思うのですよ、この堅苦しい挨拶は誰が考えたのかしらと」

「私もそう思いますわ。きつと昔は巫女の長は恐い方だったでしょう。もちろん今でも厳しい方には違いありませんが」

スハーラもそう答えて微笑んだ。

「おや、それは知りませんでした。私としたことがうかつだったわ。さあスハーラ、お茶を入れてちょうだい」

「はい。サンザ様」

白い衣のスハーラは慣れた手つきで暖かいお茶をついで、椅子に座っているサンザに手渡した。サンザの世話は、スハーラが入学した最初の年のお勤めだったので、このあたりの手順は身に染みついている。ポットをテーブルに戻したスハーラは、部屋の中をくまなく見回して小さなゴミを拾って屑かごに捨てた。今朝の掃除係はちょっとサボったようだ。

「細かいわねスハーラ。私はもう気にしなくなってしまうたわよ」

「サンザ様らしくもありませんこと、巻物の守護者の部屋の掃除は、新入生の大切な日課です。何も言わないと甘やかす事になりますよ」

「そうね。十年前のあなたは、とてもきれいに掃除をして

くれたわ。いまだにあなたほど几帳面で清潔好きな巫女には出会った事がありません。さあ、あなたもお茶をもつておすわりなさい」

スハーラは親にしかられる娘のように、そそくさと自分のぶんのお茶をついで、サンザの向かいに小さな丸いすを引き寄せて座った。若い巫女が椅子に腰掛けたちようにその時、窓の外で久しぶりの太陽にあたためられたツララがピツとするどい音をたてた。スハーラはふと窓の外に目を向けた。晴れた日の智慧の峰の空は目に痛い程青い。

しばらく静かな時間が流れた。スハーラが決心したように口を開こうとした時、それを見計らったようにサンザがゆつくりと話しはじめた。

「カインザーとザイマンの王子がサルパートに見えたようですね」

「はい。伝令鳥が伝えてまいりました。もうすぐネイランの町に着く頃だと思えます。マキア王がネイランにいらっしやいますので、まずは王様とお話をする事になるでしょう」

「いいにも参りますね」

「ネイランにどのくらい滞在されるかにもよりますが、おそらく王子達とマルヴェエスター様は二週間程の間にはこちらにいらっしやると思います」

老女は残念そうなため息をついた。

「あなたにはわかるでしょうスハラー。この国の人々は変化に慣れていません。一年の大半を雪の中で過ごす私たちは、目の前の生活の事を考えるのがまず第一で、あまり先の事までは考えるのがうまく無いのです。この国の人々の暮らしも政治の機構も、もう長い間変化していません。言うなれば国全体が年老いてしまっているような状態です。また、私達の敵である北の将も年老いました」

サンザはそこで一息ついて、ゆっくりとお茶を飲んだ。

「サルパートと北の将の戦いは、少なくとも私の代の間はおだやかに終わると思っていたのですが。まさかカインザーやザイマンの男達が拳銃して押し寄せて来る事など、考えてきた事ありませんでした。私が心配するのは、この国の人々の心があまりに急激な変化に耐えられないのではという事なのですよ」

スハラーはお茶を膝の上のせ、まっすぐにサンザを見て問い返した。

「お言葉ですが、そのために人々がギルゾンの狼に殺されてもですか」

「マキアが話し合いに出かければ良いのです。私が若い頃にしたように」

かつてライバーと対決したがある巫女は、思い出すようにそう言った。若き日、サンザはサルパートの代表と

して北の将の要塞を訪れ、これも若かったライバーに一時の平和を訴えた。ライバーはその勇氣に感銘を受けて、数年の平穩をサンザに約束した。圧倒的な軍事力を持ちながら、ライバーが老いるまでサルパートを攻略しきれなかった背景には、サンザへの好意も含まれているとの噂もあった。しかし、スハラーは納得しなかった。

「目をそらしてはなりません。サンザ様。それでこのサルパートが一時生き延びても、現在ソントールの包囲網に取り囲まれているセントーンが滅ぼされてしまいます。セントーンが滅びれば、これまでセントーンを囲んでいた将や兵が、残りのシャンドアイアの国々にやってきます。遅かれ早かれ私たちは滅びるでしょう。それに現在の北の将はサンザ様が憶えていらっしゃるライバーではありません。あの悪魔のようなギルゾンに操られているだけなのです。ギルゾンには話し合いの余地はありません」

スハラーはいつになく熱っぽくそこまで一気に話すと、少し急いでお茶を口に含んだ。しかしそんなスハラーを見ながらサンザは寂しそうに笑った。

「あのライバーも老いたのね。若いころはそれはそれは立派な戦士だったのに。それにしてもスハラー、あなたは強くなりましたね。ザイマンの王子はそれ程頼もしい方ですか。あなたとブライス王子の仲は、学校中の見習いの巫女達の噂になっていますよ」

スハラーは少し顔をあからめながら答えた。

「ブライス様だけではございません。セルダン王子も、カインザーの將軍達も、そして二千五百年ぶりにあらわれたバルトールのベリック王も。皆頼りになる方達です。彼らはこの国を北の将とあの残酷な魔法使いから解放するためにやってくるのです。どうかお心を強く持つてください。そしてリラの巻物をサルパートの民の先頭に立ててお進みください」

サンザの顔から笑みが消えて悔しそうな表情になった。「それはもうあなたの仕事なのですスハラー。私は自分の力では、もうほとんど歩く事ができません。なぜ、エイトリ神は巻物の守護者を終生とお決めになったのでしょうか。剣の守護者のように、譲りたい時にしかるべき後継者に譲る事ができればよいのに」

スハラーも唇を噛んだ。それが問題なのだ。おそらくその意志があってもサンザにはギルゾンと狼達に立ち向かう事は無理だろう。

（ああ、マルヴェスター様が早くこないかしら。何か知恵は無いだろうか）

しばらくしてスハラーは師でもある巻物の守護者の部屋を出た。庭に出ると、静謐な空気の中にかすかに春のにおいがした。

（あとふた月でこのあたりは雪が溶け始める。ここは何

とかギルゾンの攻撃に耐えられるだろう。しかし北の村々は無理だ。このままでは必ず滅びてしまう。何とかしなければ)

凍える手に息を吹きかけながら、スハールは自分の住む宿舎の建物に向かった。

(さてと、もうすぐブライスがやってくる。あの不平屋の大男に文句を言わせないように暖かな部屋と食事を準備しなければ)

そう考えながらスハールは靴の中で何気なく足の指を動かした。親指の先に穴があきそうになっている。

(最近歩く事が増えたからかしら。そうだ、ブライスは厚手の靴下を持ってきているだろうか。いや、そもそも海賊は靴下をはくのかしら)

巫女は形の良い首をかしげながら、雪の中を歩いて行った。

ネイランに向かう街道には人影がまばらだった。季節は冬のさなかであり、セルダン達は北風に向かって身を縮ませるようにしながら馬上で手綱を握った。手はすぐにかじかみ、耳ははれて厚ぼつたくなつた。すれ違うサルパートの人々は寒さに慣れていているようで、震える事もなく黙々と歩いていたが、暖かい地方に生まれ育つたセルダン達はうまく寒さになじめなかつた。やがて道端の茶色



い土が黒いくなり、緑の草がまばらになって、細かな雪が風に吹かれてサラサラと道を横切るようになったある日、セルダン達は街道の宿に逃げ込むように飛び込んだ。サルパートの土地は痩せ、人々は小さな家で質素な暮らしをしるようだったが、街道沿いの宿だけは木材とレンガをふんだんに使ったがっしりした造りをしていた。やはり、兵士や神官達が利用する事があるからだろう。

「あらかじめ言っておきますが、俺はやりませんよ」

暖かな食堂の、暖炉の前の椅子にさっさと腰をおろしたブライスはそう宣言した。粉雪をはたきながらマルヴェスターが胡散臭そうに文句を言った。

「話というのは、まず何を、という事から話すようにと習わなかったのか」

ブライスは額の輪を指さした。

「これです。こんな寒い所に我らが女神は呼び出しますせんよ」

マルヴェスターは思いもよらない事を言われたような顔をした。

「何だそんな事か。それは大丈夫だ、また綿入れを着て出てくるだろう」

アシユアンと並んで旅の支度を降ろしていたエラク伯爵が、キョトンとした顔で話を聞いていた。セルダンが説明

した。

「ザイマンの女神は、寒いと綿入れを着てあらわれるんです」

「ほほうそれは、さすがに用心深い女神様でございませう。しかしそれで美しさがいくらかでも割引になってしまつという事など、もちろん無いのでございませう」

「もちろん。ただ、普段の薄い衣姿があまりに美しいので、ちよつと残念なだけです」

マルヴェスターがそんなセルダンを見てニヤリとしながら話を戻した。

「しかしブライスよ、良い事に気がついた。そろそろ女神におうかがいをたてる頃合いだな。いざというときにあらわれてくれないと困るから、明日の朝一度試してみよう」

ブライスはうめいた。

「明日にはネイランに着くのでしよう。せめて王宮の屋根がある聖堂でさせてくださいよ」

「そこまでは譲歩してもよいが、ネイランの王宮に聖堂などあったかなあ」

「ありませんね」

やっと自分にわかる話題になったので、エラク伯爵がすかさず答えた。ブライスは憤然とした。

「サルパート人が不信心だとは知らなかったぞ」

「いえ、エイトリ神はあまり形式を好まないのです。智慧の峰の神殿とて、エイトリ神が顕現した記録はほとんど「じやいません」

「それじゃエイトリ神はどこにあらわれるんだ」

「ほとんどが吟遊詩人サシ・カシユウの場合のように山の中です。神殿や学校はむしろ政治的意味合いが強いのです」

セルダンは話がわからなくなつた事に気がついた。どうも自分には知らない事が多過ぎる。勉強をさぼつたつもりは無いのだが、カインザーの教育法自体に問題があつたのではないかと最近思い始めていた。やむなくセルダンは質問した。

「この国は神官と巫女がおさめているんですよね」

エラク伯爵が活き活きと答えた。

「はい。神官の政治力と巫女の霊力です」

「それではマキア王は何をなさっているのですか」

「もちろん軍を率いています」

「うーん、カインザーではそれはすべて王家に集中していますよ」

「それはつらやましい。しかしサルパートはこの形態で三千年間。何とか国を存続させて参りました」

「」の言葉に対してマルヴェスターは辛辣だった。

「だからサルパートは動きが鈍いのだ。大切なことがいつ

になっても決まらん。この国が今日まで滅びないで生き延びたのは、雪のおかげと边境だったのでソントール軍の本体が動かなかったおかげだ」

雲行きがあやしくなってきたので、すでにエラク伯爵と名前で呼び合う仲になっていたアシュアンが割って入った。

「エラク、マキア王へのご連絡はもう」

「はい。すでに迎えを送ってくださるよう使いを出しました」

あきらめがつかないブライスはセルダンに期待を込めてたずねた。

「セルダン、クライドン神は軍神であるとともに火の神だ。カンゼルの剣を一振りすると、暖かい炎の輪があらわれとか、そういう術はつかえないのか」

セルダンはびつくりした。

「今日は冴えてるなあ、次から次へといい事を思いつくじやないか。それはやってみる価値があるかもね」

「試すのはやめておけ。聖宝をおもちゃにするな」

マルヴェスターが怒った所へ、重い宿の扉を開けて見回りに出ていたベロフとタルカス達が戻ってきた。三兄弟は買い出しの荷物を山程かかえている。ベルフが報告した。

「やはりここでも小型の狼ルフィーの噂が広がっています。まさかこんな低地の街道沿いの町までやって来るとは思

えないのですが」

しかしエラク伯爵は心配そうだった。

「わかりません。もうサルパートの峰には彼らの餌が無いのです。ふもとの村が襲われるのは時間の問題ではないでしょうか。まさかバイオンまでやってくる事は無いでしょうか」

セルダンが不思議そうに言った。

「ドラティの次はバイオン。なぜアイシム神とバステラ神は、様々な生き物を創った後、その雛形となった生物を消さなかったのでしょうかね」

マルヴェスターが教えた。

「もとより害をなす生き物では無かったのだよ。シャンダイアが分裂した時にいち早く獣に目をつけたガザヴォックがその魔力で繋ぎとめたのだ。だから闇の側にだけ巨獣がいる。むしろ戦いの哀れな道具にされたと考えたほうが良いのかもしれない」

「そうだったんですか」

老魔術師はいつのまにか手にしていたビールを目の高さにあげた。

「もちろんそれで危険さが減るわけではないがな」

翌朝、確信的寝坊をしたブライスをスウエルトの鞍上に押し上げて、セルダン達はネイランの町に向かった。

どんよりとしてよく時間がかめぬ空の下、ブライスの腹時計が大声で昼を告げた頃、海沿いの低い土地にどっしりと広がる大きな町が一行の前にあらわれた。その町は都市と言ってもよい規模だったが、色彩には乏しく、むしろ家々を覆う白い雪の美しさが印象的だった。建物の窓は皆小さくて二重になっており、扉は厚く重く外気を遮り、煙突からは白い煙が立ち上っている。総じて、ネイランという町はサルパートではかなりマシな町のようにセルダンには見えた。

町の入り口にあたる広場で一行は馬を休ませた。

「実に堅実なつくりの町ですね」

馬車から降りたアシユアンが感想をもらした。エラクが誇らしげに説明した。

「お国柄です。華やかな町並みに期待されていたら、「」サルパートではがっかりなさるでしょう。どこもここと同じ。暖かく、そして安全を第一に建設されています」

「」になると暖かいだけでも嬉しいと思うぞ、伯爵。ザイマンの暑い海が恋しい。王の執務している宮殿というのはは遠いのか」

ブライスがふるえながらたずねた。

「町の北側。「」からだとちょうど反対側になりますな」  
「それでは宮殿より先に食堂に寄ろう。俺は腹が減った、

久々に新鮮な魚が食いたい。街道の宿ではしなびた野菜と保存肉ばかりだったからな」

ブライスがそんな話をしている所に、赤い服に緑のマントが雪に映える数十騎の迎えの騎馬隊が到着した。

「美しい部隊ですな」

批評家の目でベロフが値踏みするように感想を述べた。馬にまで華麗なガウンをかけた騎馬隊はたしかに美しかったが、あまりに揃いすぎていて歩調は、戦いの訓練より、行進の訓練に時間を費やしている事を物語っていた。

騎馬隊の指揮官は、ブライスの訴えを無視してセルダン達一行を容赦なく王の宮殿に送り届けた。宮殿は確かに町の反対側にあったが、それはおそらく北からの侵攻にそなえて町を守るために建てられたからだろう。南の国からの旅人達の前に姿をあらわした宮殿は、深い堀と頑丈な壁に守られたまるで城のような建築物だった。一行ははね橋を渡り、雪が積もった庭に馬を繋いで、宮殿の階段を上った。すると建物の入り口に、兵士に混じって長身で白髪 of 貴族が出迎えていた。先導役のエラクがセルダンに紹介した。

「王の顧問をおおせつかっている、レリス侯爵です」

長身痩躯、娘によく似た侯爵は笑顔で一行を迎えた。セルダンはレリスの手を握って声をかけた。

「お世話になります侯爵。スハールさんはお元気ですか」

侯爵は少ししわがれた低い声をしていた。

「なにぶんにも山の上の事で私には様子がなかなかわかりませんが、健康な子ですので元気にしているでしょう」

セルダンの後ろにふらりと立ったマルヴェスターが声をかけた。

「久しぶりだなレリス。王の様子はどうだ」

「相変わらずと申し上げるのが適当でしょう。北の要衝ブンデンバートは堅城です。しかし城をいくら守り抜いても、山が死んでしまつてはサルパートは滅びます。さすがに今回のギルゾンの襲撃の繰り返しには、王もお心を痛めていらつしやいます」

「痛むのが心のうちにとづにかしよう。足の先が狼の口の中で痛み出しては手遅れだ」

「ませしく。さあこちらにおいでください」

宮殿に迎え入れられた一行は、低い天井の廊下を通り抜けて奥まった中庭に面した大きな部屋に案内された。そしてそこにサルパートの聖王マキアの姿があった。

赤と緑の豪華なマントを身にまとったマキアは何か書類のような紙筒を握って、部屋の中を歩き回っていた。部屋を見回すと壁には深い色合いの壁掛けがかけられ、残りの壁も隙間無く絵や地図でうめられている。まるで壁の石がわずかでも見えると、そこから寒さが進入してくるのでは、という恐怖にかられているようにも見える。セ



ルダン達が着いた事に気がついた王は持っていた書類を机の上に投げ出して、そそくさとかけ寄って来た。

「これはこれはようこそ北の地へ。セルダン、ブライス、そして長老」

そう言ったマキアを見たマルヴェスターの顔が曇った。

「マキアたうしやで何より」

マキアは長身の人間が多いサルパート人にしては小柄だったが、細面の神経質そうな顔たちはサルパート人特有のものだった。笑えばかなりのハンサムだと思われるのだが、その目は落ち着き無く、あおじろい顔は憂いに満ちていた。

マブライスが小声でセルダンに教えた。

「マキア王の顔が、かつてマルバ海で亡くしたマルヴェスターの弟弟子のセリスに似ているという噂だ。最も魔術師セリスもサルパート王家の者だったから不思議という程でも無いが」

セルダンは違う事を考えていた。

「そうか僕は、セントーンの魔術師ミリア様に似ていると思った」

ブライスは妙な顔をして、マキア王をじっと見つめた。

「ああ、そういえばそうだ。なんだセルダン。女性の顔をちゃんと憶えるようになったじゃないか」

「ミリア様の美しさは格別だからね」

「そんな事エルネイアの前で言うなよ」

「もう言った」

「結果は」

「きっかり五日。口をきいてもらえなかった」

→

華美と言ってもよい服を身にまとった青白い細い顔の聖王は、油断のない目つきで一同を見回して部屋に招き入れた。堅苦しい挨拶がかわされた後、一同は円形のテーブルを中心にして席についた。例によってマルヴェターは座らなかった。この老人は酒を飲むときと食事をする時以外は座らない。長旅の疲れが一同に溜まっている。体力の充実しているベロフですら椅子に座った時にあきらかに安堵の息をもらしていた。セルダンはあたらめてこの超人マルヴェスターの体力に驚いた。

「カインザーと、ザイマンの王子がお越しとはこころ強い事ですな」

そう言ってマキアは口元をゆがめて笑った。マルヴェスターは笑わなかった。

「カインザーには、帰還したバルトールのベリックも控えておる。マキア、北の狼とケリをつける時が来た」

「御大はだいそれた事を事も無げにおっしゃる。ルフィーならば兵を広く分散させて、何とか防げるかもしれませんが。しかしギルゾンとバイオンにはわずかの兵など無力です。」

軍団を丸々一個当てなければ戦えないでしょう」

ベロフが発言した。

「どこかにおびき寄せないのですか」

「やったよ。だが、奴らは速い。罾など仕掛けてもかかってくれないのさ」

マルヴェスターが話を変えた。

「まずは力のある聖なる巻物をスハーラに継承させる事だ。年老いたサンザの重荷を移してやれ」

「巫女は死ななければ、次の巫女に継承できないのはご存知の事です。できればとくにしています」

「そろそろその伝統を変える時がきたのだと思う。そもそもエイトリ神が最初にそう決められたのではないのだ。知恵の巻物などという大層な者をあずかった初期の神官達が、経験の浅い若者にそれを自由にさせるのを恐れて神にお願いしたのだ」

ブライスが驚いた。

「そうだったんですか。それではもう一度神官達にエイトリ神に願わせればいいんですね」

「そう簡単にはいかんよ。この国の神官達の頑固さはいささか異常だ。王のわしの話ですら聞く耳をもたんだから。それに神官達に聞いたところによると、ルドニアの霊薬が無ければ、いずれにしてもどつにもならないらしいじゃないか」

「それは現在、バルトールのベリック王の部下と、我がゼイマンが国をあげて探している。絶対に見つけてやるぞ」  
ブライスが請け負った。カインザーの外務大臣のアシユアンが緊迫した空気をとりなすように言った。

「ぜひやら議論はそこに行き着くようですね。マキア王、我々は今日この町に着いたばかりです。しばらく状況を検討する時間をください。そしてこの件について解決策を探して参りましょう」

会議の後、部屋に案内されようとしていたブリスを、レリス侯爵が呼び止めた。

「その、少し話をしておいたほうがいいと思ひまして」

侯爵は控えめに言ったが、ブリスは遠慮が無かった。

「気になさらずに侯爵。俺達は愛し合っています」

レリス侯爵は見るからにひるんだ。

「そう娘が言ったのですか」

「いえ。ただ俺は女性に関しては詳しいのです」

「ブライス王子、スハハラは男性に詳しくないのですよ」

そして興味津々といった感じで見物していたマルヴェスターに助けを求めた。

「マルヴェスター様」

「心配するな。ゼイマンの神は女神だ、わしが見た限りでは、おそらく世界で一番女性を大切にする民族だろう」

これにはセルダンが興味を持った。

「そうなんですか。それではカインザーはどのあたりです」

「もちろんソントールも含めて、すべての国々の中で最下位だ」

「それはひどい」

「安全が第一という理由が無ければ、わしだってアーヤをあげたりせなんだわい」

ブライスもこれに同意した。

「およそロマンチックでは無いからなあ、粗暴だし、いつも戦闘で屋敷は空けっぱなしだし。たぶんカインザーの全女性は今の評価に賛成すると思うよ」

セルダンの後ろに控えていた妻帯者のアシュアンとベロフは何か反論しようとしたが、顔を見合わせて言葉が見つかからない事に気がついた。ブライスがおおらかに笑った。「そついう事です。レリス侯爵。どうかご心配無く」

王宮の客室に落ち着いたセルダンたちは、夕食の後、セルダンに割り当てられた大きな部屋に集まった。そこでセルダンはまずブライスに文句を言った。

「ブライス、ちょっとレリス侯爵に意地悪だったんじゃない」

ブライスも少し機嫌が悪いようだった。

「うっむ。こう言うては何だが、俺はなんとなくサルパート人が好きになれないようだ。俺達は戦っているんだぜ。なぜマキア王はああも他人事のように言っんだ」

ベロフもこれに賛同した。

「同感ですな。おっつけロツティとクライバーがテイト城に到着するでしょう。カインザーの戦士が使えるのですから、もう少し積極的な考えを持ってもらいたいものです」

マルヴェスターは冷えた顔で、一同を見回した。

「そろそろこの話題はやめにしよう。サルパートの民はおとなしい。だがそれは無力な事ではないのだ。かつてはサンザも勇敢だった。マキアの父もまた勇敢だった。だがそれは国を守るための勇敢さだ。敵を攻撃する事に慣れておらんだ。自分たちと違うからと言ってさげすんではいけない」

タルカスが発言した。

「王子、町では民族についての面白いたとえを耳にしました」

「何と書いていたんだ」

「ギルゾンの狼に加えて、カインザーの狂戦士と、ザイマンの海賊と、バルトールの盗賊がこの国を破滅させにやってきた」

ブライスがはじかれたように大笑いした。

「これは参った。それでも俺達はこの国を救わねばなら

んばならないのか」

それを聞いて、マルヴェスターがおごそかに言いわたした。

「そつだ。」の国を助けるんだ。そうしなければ、我々は東に進めない。いつになってもソントールに向かえないんだ」

シャンダイアを支え続けた長老のこの言葉には誰も逆らえなかった。ブライスもしぶしぶ従った。

「もちろんそのつもりです。ただちょっと期待していたのと違っていただけですよ。俺達は全力で北の将を倒しましょ」

「うむ。だがしかしちょっと難航しそうな気がしてきたぞ。我々は滞在を長引くかせるわけにはいかん。仕方がないな、アシュアンはここに残って引き続きマキアにカインザー側から見た状況を説明してくれ」

これから智慧の峰への山登りをするのではないかと恐れていたアシュアンは、ホツとしたように肩の力を抜いた。「もちろんそのために私は参ったのです。ここで連絡係をつとめさせていただきましょ」

「わしとセルダン、ブライス、ベロフ。そしてタルカス兄弟で智慧の峰を目指す。サンザとスハーラに会わねばなまじ。そして神官達にも」

翌朝、銀の輪の力を借りてエルディ神を呼び出そうとしたブライスの試みは失敗に終わった。祈りから立ち上がったブライスはホツとしたようにも見えた。

「遠いのかな、やはり」

マルヴェスターは残念そうだった。

「サルパートはカインザーのように聖宝神の力が完全に支配しているわけではないからな。この次はどうしても必要な時に、セルダンのカンゼルの剣の力も借りて試してみよう」

その日の午後、セルダン達は王宮の庭で旅の準備をした。サルパートの旅の寒さと厳しさはここまでの旅程で身に染みていたので、一同は特に防寒対策に余念が無かった。セルダンの隣で馬の背に鞍を置いていたブライスは、黒みがかったサルパートの峰の空を見上げて嘆いた。

「どうしてこんな時期に山登りをしなきゃならないんだろうなあ。あと二か月もすれば少しは気候も良くなるだろうに」

「その二か月で智慧の峰が死んでしまうのさ。行きたくないのかいブライス」

「いや、行かねばならない。俺がザイマンの王子だ」

セルダンは不思議そうに巨漢の友人を見た。

「それってどういっ関係があるの」

「わからん。ただ言ってみただ。なんとなく俺がここに



来る事にも意義がありそうな気がしたのさ」

マルヴェスターが近づいてきて、妙に真面目な口調で言った。

「おまえにしては賢い事を言ったものだ。おそらく聖宝の守護者が智慧の峰に登る事には意義があるだろう。だが我々が最終的に目指しているのが北の将の要塞だと言う事を忘れるな。使命はさらに北の果てにあるのだ」

そこへテイト城主でもある、エラク伯爵がやってきた。

「セルダン王子におつかがほしい事がございます。青の要塞の会議ではロツティ子爵とクライバー男爵がポイントポートとテイト城の間の地域を平定して、カインザー、サルパート間の陸路を確保する事になっていたと思うのですが」

「その通りです。ロツティとクライバーの軍の力からして、そろそろテイト城に着く頃ですよ」

「いや、それが」

「まだなのですか」

意外といった感じでベロフが確認した。

「あの辺の北の将の軍は強いのか」

「いえ、それがどうやらテイト城に向かっていないらしいのです」

マルヴェスターがつめいた。エラク伯爵が続けた。

「今朝着いた伝令鳥の知らせによると、どうやら、ポイン

トポートを出てすぐに北に向かったそうです」

マルヴェスターは地団駄を踏んで、真つ赤な顔をしてセルダンに詰め寄った。

「だからカインザーの將軍をかってに行動させられんのだ。おまえらを放し飼いにするとすぐにこっとなる」

「僕がしたわけではありませんよ」

「おまえの家臣だ。ああ、カインザーの貴族など信用するものではないわい。クライバーはともかくロツティまでも」  
ベロフが苦笑した。

「いや、おそらくロツティが引つ張っているのでしょう。平原であの男を馬に乗せたら止められません。仕方ないでしょう、あの二人ならばいざとなれば猛スピードで退却できます」

「かってにするがいいわい」

ベロフがセルダンに進言した。

「こちらはこちらで、少し腕のたつ戦士を補充いたしまし  
よう。山岳地帯や狭い土地では、大軍や騎馬軍団よりも  
むしろ剣技に優れた者のほうが役に立つ時があるはずで  
す。我がベロフ家の精鋭部隊の抜刀隊が必要な時が参っ  
たような気がします。船でネイランに呼びよせましょう。  
お許しが出ればすぐに出発できるように、すでにバイル  
ンには話をしてきました」

「そうだね。ブライス、もっと北のブンデンバートしろに

近いアントワには、バイルンの船では運べないと思うかい」「大丈夫だろう。ザイマンの航海士を乗せてあるから。このあたりの沿岸なら、カインザー人の操船技術でもそれ程難しくはないはずだ」

「それじゃあベロフ、抜刀隊は一足先にアントワのほうに行くように指示してくれないか。いずれにしろ戦場はもつと北だから」

「かしこまりました」

マルヴェスターはぷりぷりしながら、横でかしこまってるまているエラク伯爵に指示を出した。

「ついにカインザーの特殊部隊まで繰り出すのか。どうやらカインザーの狂戦士というたとは正確らしいわい。エラク、わしの言葉として、青の要塞のオルドンに伝えてくれ。トルソンだけは動かすな。あの男がポイントポートを離れたら、この戦線全体が大混乱に陥ってしまう」

セルダンが同胞をかばった。

「マルヴェスター様。それはあんまりな言い方」

「おまえ達にはわかっておらん。かつて二度、ポイントポートを手中にしたカインザーが結局退却を余儀なくされたのも、カインザーの諸侯が己の勇を頼んで、ソントール相手に無謀な戦いを挑んだからだ。今回そのテツを踏んだら、サルパートとセントーンが道連れになる」

それを聞いたエラクは、真っ青になって伝令鳥の小屋に

飛んっでいった。

北の将の洋要塞の書庫は冷たい巨大な空洞だった。襟が高い茶色の長衣をまとった小鬼の魔法使いテイリンは、空気が目立つ書棚を残念そうに眺めてため息をついた。

（西の将の書庫には戦闘に関する本しか無かったし、黒い盾の魔法使いゾノボートの書棚は黒の魔法の本しか置いていなかった、だがこの空虚さはひどい。北の将はもう本など読まないのだろう）

ちなみにテイリンはこの要塞の魔法使いギルゾンにはまだ会った事が無い。黒い短剣の魔法使いはつねに外を駆けまわっていて、要塞の中にはかつてゾノボートが築きあげたような大仰な組織も祭壇の間も無かった。こちらも本など読まないようだ。

元々山育ちのテイリンは寒さに強かったが、テイリンの隣に並んでいる小男は寒さに震えていた。

「マスターテイリン。なぜここはこんなに寒いのです」「火が全くありませんからね。イサシ殿。きちんと管理されていれば暖炉などあってもよいのでしょうか、この状態では火を置くことはかえって危険です」

バルトール人は悲しそうな顔になった。

「われらが旧都ロツグも北方の地です。しかし海辺にあるのと、踊りの神バリオラ神が民人が裸で踊れるようにと

教えた建築様式のおかげで、これ程は寒くありませんだ」

イサシはテイリンが寂しげに持っているボロボロになった本にちらりと目をやった。

「それで、探しのものは見つかりましたか」

「いいえ、ありませんでした」

「よろしければ、何を探しているのかお教えいただけないでしょうか。我らがバルツールマスターは、かつてのバルツールの首都ロッグをおさめる実力者です。ほとんどの物は探し出せると思いますが」

テイリンは別に探し物を隠してはいなかった。巨竜ドラティが自分に託した卵の存在を知らなければ、テイリンの本当の目的を知る事はできないのだから。

「ミルトラの水というのを聞いた事がありますか」

「それはシャンダイアでなれば手に入らない神々の秘密の一つです。豊穡の女神ミルトラ神の水で、セントーン王国の力の源と言われています。どんな形態で存在するのは私も知りません。おそらくはセントーンのほうがより詳しい情報が得られるでしょう。東の将や南の将の元に手がかりがあるかもしれませぬ」

「でしょうね。しかしセントーンを取り巻く状況は複雑すぎて。はみ出し者の私やゾックたちはちょっと近寄りがたいのですよ」

「お力添えはできると思っていますよ」

テイリンは不思議そうにバルトールマスターの使者を見た。ロッグのマスターはあきらかにシャンダイアを裏切った。シャンダイアの団結力も終わりに近づいているのだろうか。

「あなたこそ、ソントールに通じるのならば。グラン・エルバ・ソントールに行ったほうが良いのではないですか」

「グラン・エルバ・ソントールに潜入しているバルトールマスターが態度を明確にしております。手強い男です。それに我々はベリックという、王を名乗る男についてもっと知らねばなりません。カインザーではこの男に会いましかたか」

テイリンは苦い思い出をかみしめて答えた。

「いいえ。私はベリック王には会いませんでした。シャンダイアの貴顕には一人も会っていません。山の中を行って帰ってきただけです」

イサシは失望の色は見せなかった。むしろベリックについて知る者は少ないほうがいいだろう。この魔法使いの使道はその思いつくだろう。

「そうですね、それは残念です。それで、これからあなたはどうかなさいますか」

「もちろん。ギルゾンに会います」

茶色の髪の若い魔法使いは当然といった様子でそう答

えた。

クライバー男爵家で用意された大きな部屋で、バルトールの少年王ベリックは二通の手紙を前にして考え込んでいた。前回の会議に顔を見せなかった三人のマスターのうち二人。旧バルトールの首都ログのマスター・マサズと、ザイマンのマスター・メソルからの手紙である。今朝、フスツによってもたらされたその手紙は、ベリックの心に行動の時が来たという予感を持たせた。

ベリックはまずログのマスターの手紙を手にした。手紙はバルトールの伝統的なバラの刻印の紙に書かれている。

「王の帰還を心よりお喜び申し上げます。つきましては、なるべく早くログに「帰還あそばされますよう。まずはサルパートまでお迎えの使者をお送りいたしました。ぜひともおいでくださいますようお待ち申し上げます」

ベリックは横に控えているフスツに手紙を渡した。フスツは一瞥して鼻で笑った。

「誘いにもなりません」

「うん、決別宣言に近い文章だと思う。むしろこれ程態

度をあきらかにした理由が知りたい」

「ログのマスターはマスター議会の議長でもありません。王が帰還されるまでは、バルトールの第一人者だったので。当然権力を手放す気になれないのでしょうか」

「その手紙にはサルパートで待つとある。サルパートのマスターは何かつかんでいるかい」

「北の将ライバーの元にマスター・マサズの使いが行ったもようです。名前はイサシ。マサズの腹心です。よほどの同盟に意欲があるのでしょう」

「イサシの相手をおまえに頼んだら手に余るかい」

「フスは嬉しそうにニヤリとした。

「始末してもよろしいのでしたら、喜んで」

「場合によっては頼む」

もう一通には育ての親であるメソルの、謎を含んだ言葉が書きつづられていた。ベリックは不思議な思いで手紙を読んだ。そこに書かれた引つ掻くような筆跡は確かにメソルのものだった。そこにはこう書かれてあった。

「大切なものを送りました。必要とされる場所で役に立つ人物に持たせています。それがどこか、それが誰かはおまえならばわかるでしょう」

ベリックはフスを振り向いた。



「バルトール人が使っているカインザーの港はどこ」

ベリックの質問は短く鋭い。フスツは相手が少年であるという事を時々忘れるような思いがした。この王は恐ろしい程頭がいい。

「港のある所はぼすべてでいいます」

ベリックはちょっと考えた。

「メンルおばさんが、おいら宛に何かを送ったらしい。持っているのがバルトール人以外の可能性もある。ザイマンからの荷物を、バルトール人以外の者が手に入れる可能性はあるの」

「普通はいいいけません。ただしマスターの許可があれば例外もいいます」

「亡くなったロトフが死ぬ前に許可を与えた者のリストはある」

「いえ、リストという程の人数はございません。ロトフ様は用心深い方でいきましたので」

「ならばまずは、その洗い出しだ」

「この半年という事でしたら一人です」

「名前は」

フスツはそれによってベリックの心が決まってしまうのを恐れるかのように言った。

「サルパートの吟遊詩人、サシ・カシュウ」

ベリックの心は決まった。

「よし、サルパートに行くサルパートのマスターに使いを送ってくれ」

「なんと、それは危険でございます」

「ああ、けどおいらが行かないといけないようだ。それにここにじっとしているのはおいらの性にあわない」

フスツはしばらく黙って若い王を見つめていたが、やがて決心したようにうなずいた。

「わかりました。私と現在我々に用意できる最高の人材が数人お供する事にいたします。ただし王の出発は隠密にします。カインザーのオルドン王にもです。ここ、セスタには身代わりを置いておきましょう。王に似たような外見のバルツール人の少年を用意いたします。幸い王の顔を知る者はまだ少ないのでそれごまかせるでしょう」

「それはいい考えだ。しかしそクライバー家の者達だけに、どうしても協力してもらわないといけなくなるな」

（問題はごっちゃってあの女のご機嫌をとるかという事になるかな）

フスツとの打ち合わせの後、ベリックは厩に行って愛馬の鼻面をなでた。ライア山で引き取った小柄な栗毛馬は、牡馬なのになぜかおせつかいなアーヤによってフオラという可愛い名前がつけられていた。ベリックの乗馬になってからしばらくは疲れが残っていたらしく、筋肉が硬くて歩様がぎこちなかったが、十分に休みをとらせた

おかげで今ではすっかり元気になっている。ベリックは飽きずに馬の鼻をなでた。

（とても丈夫で辛抱強い。この馬の元の乗り主はとても良くこの馬を育てた。だが今回の旅に必要なのは、足が速い馬だ。そしていずれ自分に必要になるのは、会戦で揉まれてもつぶれない頑丈な軍馬だ）

翌朝、階段を降りてきたアーヤを待ちかまえていたのは、濃い青のカインザーの宮廷用の服で正装したベリックだった。

「アーヤ。君にプレゼントがあるんだ」

アーヤの顔に花が咲いたような笑顔が広がった。

「まあ素敵。宝石、王冠」

ベリックはちよつとひるみながらも、笑顔をつくるって少女に向けて右手を差し出した。

「「じちらにじつぞ、レディ」

アーヤを連れてベリックが裏庭にまわると、そこにはクライバー男爵の息子のアントンと、栗毛馬のフォラが待っていた。

「あら、フォラじゃない」

「欲しがってたろう」

アーヤの目が怪しく光った。

「何をたくらんでいるの、盗賊王」

ベリックはアントンとアーヤに近くに寄るように手招

「君たち二人に相談がある」  
きした。